

第 27 回年次大会
JASEC 研究フォーラム—シンポジウム
「ミスコミュニケーションから迫るコミュニケーションの本質」

<要旨>

英語コミュニケーションを論ずる際に、語学力、異文化理解力、ポライトネスへの配慮などの不足がミスコミュニケーションの原因となることはよく指摘される場所である。他方、企業の取引や国家間の交渉では、より高度のコミュニケーション技術が要求される。たとえば、忖度を含む言外のメッセージの問題や、交渉を有利に進めるための情報の意図的操作などがその典型例といえる。本シンポジウムでは、ミスコミュニケーションやディスコミュニケーションの事例を考えながら、交渉の現場に立ち現れるコミュニケーション手法について論じた。

言語学（語用論）から見た
“Miscommunication” / “Discommunication”

山 本 英 一
 （関西大学）

1. ミスコミュニケーション

コミュニケーションが正常に行われず、相手が誤解をしてしまい話し手の意図が伝わらないケースを<ミスコミュニケーション>と呼ぼう。ミスコミュニケーションを観察すると、コミュニケーションの本質が見えてくる。たとえば、美術館の入口に一組の夫婦がいる。先に入場しようとする夫を見て、係員がその妻に声をかけるとする。

(1) Would the gentleman like to leave his bag here?

（ご主人こちらにバッグを置かれませんか？）

これに対して、妻は「いいのよ、重くないから」と答えるが、決まり悪そうに係員が、「実は昨日窃盗事件がございまして」と切り返す。つまり、(1)は問いかけになっているものの、実際には「バッグを預けてください」という<依頼>だったのである。健全なコミュニケーションでは、相手を疑うような（＝傷つけるような）発話は禁物である。ゆえに、(1)はそれをオブラートに包む有効な代案となる。言語理論では、これを<間接発話行為>というが、オブラートに包まれているために、相手にはわかりにくい。「いいのよ、重くないから」はミスコミュニケーションの一例と言える。

2. 会話の公理

正常なコミュニケーションが成り立つために、私たちが従っているとされる規則を P. Grice は「会話の公理」と呼んでいる。それには、4つの公理がある。

- A. <質の公理> 本当のことを言え。
- B. <量の公理> 過不足なく情報を提供せよ。
- C. <関係性の公理> 関係のあることを言え。
- D. <様態の公理> 順序立てて、簡潔に言え。

紙面の都合で詳細は省くが、一つだけ例を考えよう。

(2) 記者：今回の亡命事件にアメリカ政府が積極的に関与していませんか？

政府高官：そういう結論をくだしていただいても、あえて反対はしません。

本来、政府高官は「はい」か「いいえ」で答えるべきところ。あえて歯切れの悪い言い方をしたのはなぜか。上の公理を参照すれば、<様態の公理>に違反する。Griceによれば、公理違反は聞き手に真の意味（なぜそのようは発話をしたか）を考えるための推論のきっかけを与える。ここでは、「他国に事案に口出しをしたとすれば内政干渉を非難されるが、他方でアメリカ政府がこの事案を見逃したとなるとアメリカの沽券にかかわる。ゆえに、積極的に肯定もしないが、否定もしないという意図であろう」という推論による読み取りが聞き手に求められる。言語学では、この推論を「推意」と呼ぶ。

3. 推意の取消可能性

この「推意」という、いわば言外の意味は「取消可能性」という特徴をもつ。上の例では、後になって記者が高官に対して「あなたは、肯定も否定もしないが、アメリカが関わったことを言外に匂わしたのではないか」と詰め寄ったとしても、高官は「それは、あなたが勝手に憶測したこと（最近の流行り言葉では「忖度したこと」）。私はそんなことを言った覚えはない」とシラを切ることが可能なのである。

4. ディスコミュニケーション

誤解（＝ミスコミュニケーション）が付き物とはいえ、正常なコミュニケーションは、いわば性善説で成り立っている。言い換えれば、Griceの公理が厳格に守られるか、さもないれば公理の違反が明確にわかるように発話がなされる。前者は「文字通りの意味」を、後者は「推意」を、それぞれ伝えることになる。しかし問題は、公理を守っていないにもかかわらず、そのことを明確にはわからないように発話する際に生じる。たとえば、

(3) 学部長： 留学生の数を増やしたいのだけど。

学長： （やりたければやりたいように勝手に）どうぞ。

このやりとりを学部構成員に対して、「学長から留学生の数を増やすように依頼されました」と報告したとしよう。実は、学長は過去の経緯も含めて、そのような試みが不可能であり、学内的にも認められないことを踏まえて、「(勝手に) やったら？」と皮肉交じりに答えたにすぎない。つまり、「どうぞ」は確かに<質の公理>に合致するが、過去の経緯を含む前提部分への言及(<量の公理>)がすっかり抜け落ちているため、結果として半分本場で、半分ウソの発話となっている。これを<半端な真理>と呼ぶ。性善説で成り立っているコミュニケーションの現場に、意図的に投げ込まれる<半端な真理>は、公理違反に気づく手立て（ここでは、学長と学部長の会話の前提となる情報）を聞き手が持たないために、為す術もなく騙される（話し手側から言うと、聞き手をまんまと騙す）ことになる。話し手側の思惑により意図的に相手をミスリードする行為であり、これは<ディスコミュニケーション>の典型例といえる。ディスコミュニケーションの詳細は、拙著（2019）を参照されたい。

References

- Grice, P. (1975) “Logic and Conversation” in Cole (ed.) *Syntax and Semantics 9*, New York: Academic Press, pp.113-27.
- Grice, P. (1989) *Study in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in Interaction*, London: Longman.
- 山本英一 (2019) 「ウソと欺瞞のレトリック～ポスト・トゥルース時代の語用論～」.
大阪: 関西大学出版